

舞台、台本、翻訳へ —英語・バイリンガル Kyogen への挑戦—

ジョナ・サルズ*

1 狂言台本の変貌

日本演劇の翻訳版が雑誌や本に出版されて、100年以上経つ。本稿では、公演活動や出版のために英語や諸外国語に翻訳された狂言について論じる。

まず、狂言のテキストの特徴について歴史的文脈から論じてみよう。

狂言台本は、能と同様、だれによって書かれたか明らかでない。しかしながら、その内容は実演の場を通じ、数世紀の間受け継がれてきた。そして、長期にわたる順応・競合・地理的移動および秘匿性の結果、台本の内容は流派・劇団ごとに変化した。極度に定式化されてはいるが、テキストの多様性と即興性については、現在も議論の余地がある。

能の台本には1420年の世阿弥筆本があるが、これに対し狂言の台本がおよそ200年下った虎明本(1642年成立)しか残っていないのはなぜだろうか。この理由は資料1 a,b から推測できる。

資料 1a

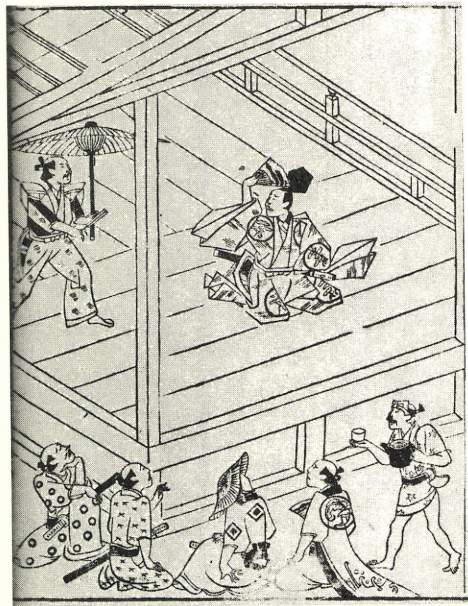
- ・大明^(ママ) 出て人をよび出す。 [天正本 1560]
- ・(果報者) へ罷出たる者は、此あたりにかくれもない、大くわほうの者で御ざる、誠にめでたい御代なれば、うへ／＼の事は申におよばず、した／＼までも、あなたのふるまひの、こなたのふるまひのと申て、おびたゝしひことで御ざる、それ

に付て、某も近日一族達を申入て、ふるまはふと存る、あるかや、いいたか^(太郎冠者) へお前に [大蔵虎明本 1642]

・シテ「是は在所の者、目出度正月なる」と云、「明日おせちを一ぞくに申、かれいにて上座に御ざる人に末ひろがりを進上する」と云て太郎くわじやをよび出す、出る [天理本(六儀) 和泉流 1660?]

資料 1b

- ・▲大名罷出たるは。かくれもない大名。太郎くわじやあるか▲くわしや御前に



[狂言記 1660]

* 龍谷大学教授

能が大勢の役者、囃子方（音楽家）、文学的な脚本、地謡を用いるのに対して、狂言は2～4人の少人数、同じ流儀、限定した音楽で演じる。狂言は演目の融通が利く即興の多い芸能である。こうした特徴は現在の狂言にも当てはまる。現行の台本をみると、登場人物、装束、型の図を示すだけでなく、必ず先輩の狂言師が目を通し、微妙な発音のニュアンスを書き入れていることがわかる（資料2）。

2. 英語狂言の挑戦

英語狂言の歴史においても、とくに出版や公演に向けた英訳の過程で、上記のような多様性が見られる。英訳の検討から以下の事実が明らかとなった。

最初の狂言の英訳は1880年代に現れた。Iezzi（2007）によると250演目中、150本程度が英訳され（その間、仏訳と露訳も行われた）、人気の演目（『ぶす』、『棒縛』）は6回も翻訳された。

ここで、なぜ狂言がこれほどまでに外国人の間で人気を博したのかを考えてみたい。まず、中世

資料2 translating the name-taking opening for page and stage

Master Kore ha kono atari ni sumai itasu mono de gozaru...Yai, yai, Taro Kaja, oru kai yai?
これは此の辺りに住まい致すものでござる。 やいやい、太郎冠者。 居るか いやいや？

Servant Haaa. ハアア

(Lit: I am from this place. Hey Taro Kaja, are you there?)

(alternative openings, "I am a wealthy man," "I am well-known around here")

1. Michio Itow and Louis V. Ledoux, FOX'S GRAVE
I am a man of this neighborhood...Yai! Yai! Tarokaja! Are you there?/Hai. Humbly before you.
2. Yone Noguchi, THE DEMON'S SHELL, p.15
I am one who lives in this neighborhood...
[The DEMON TILE], p.177 Is Taro there?/Yes.
3. Arthur Sadler, THE LIQUOR-PIPE, p.136
I am a man of these parts...Ho! Is Taro Kwaja there?/At your service, sir.
4. Richard McKinnon, BUSU Sweet Poison, p.53
I am the master of this house...Tarō, are you there?/Yes, sir.
5. Royall Tyler, SHIBIRI, p. 73
I'm from the neighborhood...Ahoy! ahoy! Taro Kaja! You out there?/Yesss!
6. Sakanishi Shio BUSU, p.84
I am the master of this household...Taro boy, are you there?/Ha!
7. Donald Keene, BUSU, p.10
I am a gentleman of this vicinity...Taro Kaja, where are you?/Here, Master/
8. Don Kenny, BUSU, p. 3
I am a resident of this neighborhood...Taro Kaja, are you around?/Here.
9. Salz-Kominz, SHIBIRI (unpublished)
I live in this area...Hey, Taro Kaja, where are you?/ Yeees...
10. BONK, BUSU (Salz, Lammers-Onishi, Iezzi), unpublished
I am a wealthy man who lives in this house...Hey, you two, please come here./Yes sirrrrr!
11. Berberich, TRICKED BY A RHYTHM/YOBIKOE, p.42
Everybody knows me around here...Jiro Kaja, are you...there?/I...`m here. Right before you.
12. Carolyn Morley, THE SNAIL, p. 182
I live here...Hey, hey! Where is everybody?/I'm here, sir!
13. Andrew Tsubaki, SUEHIROGARI, Spring ATJ, p.6
I am a man of great means. Yai, yai, is anyone there?/Yes, sir.
14. Yuriko Doi and Theatre of Yugen, SHIMIZU, p.23
I am a man from this area...Tarō Kaja, are you there?/Haaa.

日本の日常生活の描写が、言語的また社会的に魅力的であったと考えられる。狂言には、欧米の中世ファースや近代喜劇に通ずるストーリー性がある。夫婦喧嘩、主人と召使いの関係、サギ師などを題材にした、普遍的で共感しやすい演目が多い。また、合理的な理由もある。20分間の上演時間と2～3人の登場人物は大学の授業にふさわしい規模であり、堅い詞章のある能や立ち回りの多い歌舞伎より、狂言は比較的容易に訳すことができた。Donald Keene や Royall Tyler など能の翻訳家にとって、狂言の翻訳はほどよい息抜きとなったようである。

では、実際の翻訳について詳しく見てみよう。資料2に示したように、同じ名乗り台詞に対しても、さまざまな英訳がある。台詞のアクセントを文章上に表現するため、翻訳者が多彩な表記を用いているところに注目したい。例えば、“一” “…” “Yesss” “YES!” などである。また、文化的習慣、登場人物の人間関係、詩文などは、注意深く解釈して訳す必要がある。

翻訳にとどまらず、公演用の脚本も存在する。狂言はおよそ100年間にわたって英語で演じられてきたが、こうした中で翻訳家は以下のような問題に直面することになった。

第一に、日本語と英語の語順の違いから生じるアクセントの位置変化である。いかにして狂言の音楽性、メロディー、リズム、音程、テンポを表現するかが課題となる。狂言に独特な「二字上がり」(二つ目の文字、言葉を強調する)に従うと、波のような発声法を行うことになる。このような英語の発声法には、イギリス式の弱強5歩格(iambic pentameter)とアメリカ式の節をつけた読み(singsong)の別があり、どちらか一方を採用する決め手がない。したがって、狂言の発声法を英語で表現するには、次にあげる2つの選択肢がある。ひとつは、狂言の波のような発声法に対応する、同等の発声法を創り出すことである。例えば、二字上りを英語で実践すると、“I am a

resident of this neighborhood,”(下線部強勢、Don Kennyの方法)のようになる。波のような発声を再現できるが不自然な英語発音となるのは否めない。もうひとつのやり方は、“I am a man, who lives around here,”(Nohoの例)のように、英語元来の抑揚を活かすやり方である。この場合は前者と異なり、リズムに変化を与えた自然な英語として観客に届く。

第二に、ジェスチャーを伴う擬音語・擬態語・感嘆文・感嘆詞の翻訳が挙げられる。「さらさら」「どぶーん」といった言葉をどのように訳すか、という問題である。狂言に独特なオノマトペは仕草とともに発話されることがほとんどである。英語で演じる方法は2通りある。まず、そのまま日本語を使う手がある。この場合、日本語の音の違和感が面白さに転じる。一方、既存の英語を利用したり、新しい擬音語を創作したりするやり方もある。例えば、「やっとな」であれば“Alley, alley oop!”、「ドブーン」は“plu-nk!”と訳すことができる。この手法には、子どもっぽいおかしみを演出する効果がある。

第三に、文体の選択がある。古文調にするか、現代風にするか、あるいは折衷するか、さまざまな方針が考えうる。分かりやすさと格調のどちらを優先させるべきか、という点にも深く関わってくる問題である。

第四に、翻訳者の置かれた環境やバイアスといった問題がある。まず、先行作品との影響関係がある。狂言の場合、中世ファースや、シェークスピアの18世紀の王政復古期のコメディ(Restoration Comedy)、Dr. Seuss (The cat in the hat)のおとぎ話などの先例が翻訳者にとってモデルとなりうるだろう。さらに、逐語訳か意識か、ひいては厳密な正訳かわかりやすい誤訳か、といった個々の方針の問題も生じる。

以下、英語・バイリンガル狂言公演に向けた挑戦を、さまざまな実践者を挙げて紹介する。古語の使い方、台詞のリズム、しゃべりやすさなど、

各々の方針に注目して頂きたい。

1. カンサス大学 榎アンドルー

“In my translation I chose to retain some Japanese expressions in the original, particularly when the words are interjections (*sorya, sore*) used to call someone’s attention (*yai, yai*), onomatopoeia (*kon, kon; tsu-u*), or an expression of surprise (*ya-a!*)…In performance, the accompanying gestures and movements, as well as the tone and rhythm, make the meaning clear.”

Asian Theatre Journal (Spring 2007), p. 7

擬声語をそのまま利用し、仕草によって意味が明らかになる。

2. ポートランド州立大学 Laurence R. Kominz

“In our class plays, as with kyogen in Japan, communication between actor and audience should be clear, both vocally and semantically, and should not be impaired by archaisms or sophisticated literary conceits.”

Kominz ATJ 2007, p.238

分かりやすさが肝要

“creating vocal English equivalents to the Japanese kyogen voice that approach the original variety in pitch, tempo, volume, and timing.”

Kominz ATJ 2007, p.241

狂言の音楽性を意識し、忠実に写し取った翻訳である。資料3はコミンズ氏の小唄『府中』の英語版、日本語版の対訳の一部である。

3. Theatre of Yugen(サンフランシスコ) Doi Yuriko

“continually keep our audience in mind. The piece we are translating will eventually be a living piece of theatre”

Doi and Valdes, Theatre of Yugen Asian

Theatre Journal Spring 2007: p.20

生き生きと芸として訳さなければならない

4. 能法劇団(京都) Jonah Salz

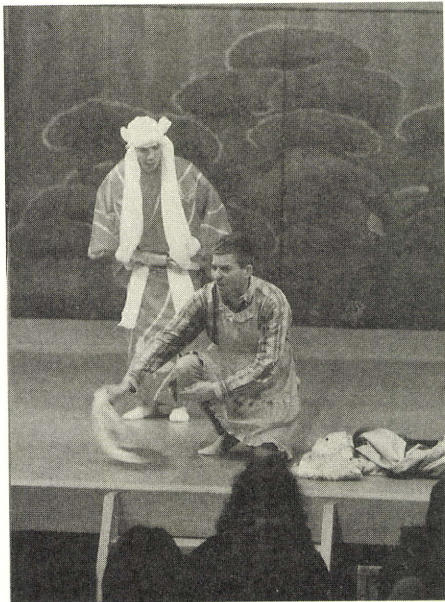
茂山あきらと能法劇団を1981年に設立。サルズ作のライミング版の『しびり』を試演した：

資料3

Fuchu 府中	Laurence R. Kominz, transl.
Kokowa dokoo zo to, moshihito towaba. Kokowa Suru u ga no, Fuchu u no shukuyo.	If someone asks you where this place is, This is what you say to him. This place is an inn in Fuchu, Capital of Suruga.
Hito ni nasakeo Kakegawano shukuyo.	It's called Kakegawa Inn, The people there are oh so kind.
Kiji no-me n dori ... hororitootoitte Uchikiseteshimete.	There she is—the pheasant girl... Wings aflutter in she comes Now I will hold her in my arms.
Shio no, shio no, ito shiyono.	So lovely, so lovely, so lovely is she.
Itodoito shu te, yaru se na a yaa.	Now I am so enraptured. I don't know what to do.

"I am a man who lives in Japan who owns some land...
I'm planning a party, and to my surprise,
Discovered we're missing the needed supplies.
So you must dash into town and back,
To fetch sake and delectable snacks.
What is more, I too have many chores,
So hurry back, without delay--no dawdling on the way."

英語やバイリンガル狂言は、今後さまざまな国で試みられることになるだろう。現場からは、それぞれの狂言師が独自の芸風をもつように、劇団や翻訳者によって幅広い味わいが生まれることが予感される。(生田慶穂 翻訳)



資料4 サルズのバイリンガル狂言
『濯ぎ川』より (村中修撮影)

参考文献

- Chamberlain, Basil Hall (1902) *Things Japanese*. London: John Murray.
- Doi, Yuriko and Lluís Valls, transl. (2007) "Shimizu (Spring Water)" *Asian Theatre Journal* 24, 19-33.
- Iezzi, Julie A., Katherine Mezur, and Susan Veyveris (1989) "Tricked by a Rhythm" *Noh and Kyōgen: An Interpretive Guide*, 42-46. Edited by Julie A. Iezzi. Honolulu: University of Hawaii.
- Itow [Ito] (1923) Michio and Louis V. Ledoux [Ledoux]. *The Fox's Grave*. *Outlook* 133, 306-308.
- Keene, Donald transl. (1955) "Busu." *Anthology of Japanese Literature*, New York: Grove Press, 305-311.
- Kenny, Don (1989) *The Kyogen Book: An Anthology of Japanese Classical Comedies*. Tokyo: Japan Times.
- McKinnon, Richard N. (1968) *Selected Plays of Kyōgen*. Tokyo: Uniprint.
- Morley, Carolyn Anne. (1993) *Transformation, Miracles and Mischief*. Cornell East Asia Series 62. Ithaca, NY: Cornell University East Asia Program.
- Noguchi, Yone (1907) *Ten Kiogen in English*. Tokyo: Tōzaisha.
- Sadler, A. L. (1934) *Japanese Plays: No-Kyogen-Kabuki*. Sydney: Angus and Robertson.
- Sakanishi Shio (1938) *Kyōgen: Comic Interludes of Japan*. Boston: Marshall Jones [reprinted as *Japanese Folk Plays: The Ink-Smeared Lady and Other Kyogen*. Rutland, VT: Tuttle, 1960.
- Tuck, Oswald G. (1924) *Transactions and Proceedings of the Japan Society of London (TPJSL)* 21: 4, 6-7, 8.
- Tyler, Royall (1978) *Pining Wind: A Cycle of Noh Plays*. Cornell East Asia Series 17. Ithaca, NY: Cornell University East Asia Program.